

## 学習塾、オンライン化加速も対面指導は継続 「子どもたちのため」 新型コロナ

毎日新聞 2020年4月15日 21時07分 (最終更新 4月15日 21時08分)



緊急事態宣言後、オンライン指導に切り替えた「学習塾 寺子屋」。家庭の事情で通塾してきた児童には、窓の開放やマスク着用など感染防止に配慮して対応している＝北山夏帆撮影

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う休校が長引く中、学習塾ではインターネットを活用したオンライン指導に切り替える動きが加速している。一方、仕事が休めないなどさまざまな事情を抱える家庭のため感染防止に配慮しながら対面指導を継続している塾もある。「先行きが見えない中、日々選択を迫られながらみんな必死に生きている。必要とされる以上やるしかない」。東京都内のある塾の代表者はこんな思いで日々子どもたちと向き合っている。

「テキストをこっちに見せて。もう少し上げて。……見えました」。4月10日午後、東京都世田谷区の「学習塾 寺子屋」。代表者の岩岡いづみさん（57）がオンラインで小学6年の児童3人に算数や国語を教えていた。その傍ら、別のスタッフが、換気のため開け放たれた窓のそばで、小学生の女兒の漢字ドリルを添削している。室内は全員マスク姿だ。

寺子屋の生徒は小中学生や不登校児ら約40人。3月の全国一斉休校が始まると、午前9時から希望する子どもたちを受け入れ、昼食を一緒に作った。4月7日に緊急事態宣言が東京都などに出されたためオンライン指導に切り替えた。だが、発達の偏りがあり1人で勉強するのが難しかったり、ネット環境がなかったりする家庭から通塾を続けてほしいという要望があったため、人数制限やマスク着用などを条件に受け入れることにした。塾生の半数がオンライン、数人が通塾、3割が休むことを選んだ。「可能な限り子どもの『まなび』を継続・維持していきたい」と岩岡さんは力を込める。

寺子屋は学力向上だけが目的ではない。設立は1983年9月。校内暴力が吹き荒

れていた時代だった。岩岡さんは短大で幼児教育を学び、卒業後は子どもを支える活動をしたと考えていた。「問題を起こす子は勉強したいとの気持ちがある一方、生活困窮や親の病気など複雑な事情を抱えていた。力になりたかった」。不登校や発達障害などの子どもらも受け入れ、こども食堂を主宰するなど地域のために奔走してきた。

初のオンライン指導は予想以上に大変だった。図形問題の解説は手持ちのホワイトボードを使うが、パソコン内蔵のカメラに向ける角度が難しい。オンラインでは会話が途切れることもある。学校は大型連休明けに本当に再開できるのか。そんな不安もある。

それでも日々子どもたちと接する中で光を感じている。中学生を中心に「やらなきゃダメだ」と自ら勉強に向かう姿がみえる。「家でイライラして物に当たってしまっている子もいるけど、みんな必死に前を向こうとしている。子どもはたくましい。私も励まされます」【千脇康平】

---

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.